



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成18年1月15日
通巻45号

バルトン生誕150年記念事業が行われます

日本下水道文化研究会は毎年8月にバルトン忌を実施してきました。バルトンについては1979年に東京大学の石橋多聞先生がバルトン没80周年を機に記念式を最初に行いました。その後、石橋先生は前代会代表であった稲場紀久雄氏に資料一切を手渡され、後事を託されたとのこと。このことがきっかけで、当会が毎年バルトン忌を行っております。

バルトン忌はバルトンの眠る青山霊園に墓参するだけでなく、バルトン研究に著名な方々を講師に迎えて講演活動も行っておりまいた。その結果、バルトンの極めて幅広い活動ぶりが明らかになったと思います。上下水道に関しては当然ですが、凌雲閣(浅草十二階)の設計、写真界における先駆的業績、コナン・ドイルとの親交、父親であるJ・H・バートンも福沢諭吉を通じて日本の近代化に大きな影響を与えていたことなど多くの事柄が紹介されました。このことを通じてバルトンの業績の広がりとその深さに改めて驚きを禁じえません。しかし、残念なことにバルトンは帰国途上東京で逝去されたので、その輝かしい業績は本国では殆ど知られておりません。

今年はバルトンの生誕150年に当たる節目となる年ですので、バルトンの業績とその功績に報いる感謝の念をスコットランドに伝えるべく、記念事業を行うことにな

りました。当初はその企画をバルトン忌の延長線上で考えましたが、多くの識者から当会のみならず水道・下水道界の他、関係する諸団体にも呼びかけて実施したらとの声が出、当会もその一翼を担う形で実施することになりました。

記念事業としては、日本及びスコットランドにおいて講演会(バルトン撮影による写真、近親者の描かれた絵画の展示、玄孫であるK・コスナー氏の津軽三味線演奏等を含む)、記念碑の作成(スコットランドに設置)、記念誌の刊行等が企画されております。1992年のバルトン忌にブリティッシュ・カウンシル駐日代表のR・P・ジョセリン氏はメッセージを寄せられ、「私たち(BC)は英国の技術上の専門知識と共同で成された日本の初期の産業振興を祝う記念会に関与できることを誇りに思います。私たちはW・K・バルトンが非常に効果的に育んだ友好と善意の基礎を見続け、また、これらが両国の将来の技術や文化的関係にとって動かし難い基礎として用いられることを望んでおります」と述べております。このことも合わせて考えてゆきたいと思っております。

会員の皆様には、近々に趣意書を送付させていただきたいと思っております。どうか多くの方々がこの記念事業に賛同され、ご参加くださることをお願いいたします。

(文責 評議員 谷口 尚弘)

第8回下水文化研究発表会が開催されました

昨年11月26日第8回下水文化研究発表会が行われました。9時45分から基調講演として、奈良文化財研究所・松井章氏より『古代宮都と汚水処理—屎尿と汚水処理』と題して、古代のトイレの遺跡から食生活を推理するなど、考古学の醍醐味を聞かさせていただきました。続いて行われた各セッションの発表についてはそれぞれの座長を務めていただいた方々からの報告をお読みください。各セッションの発表のあと、京都産業大学・勝矢淳雄氏をコーディネーターとして「水環境と歴史」をテーマにパネルディスカッションが行われました。パネリストは、流通科学大学・長山雅一氏、神戸大学・神吉和夫氏、日本下水道文化研究会・栗田彰氏、京都府・山崎達雄氏、日本下水道文化研究会・山野寿男氏の6氏です。長山氏からは大阪の水に関する遺跡について、神吉氏からは江戸時代の上水道の遺

跡について、栗田氏からは江戸の下水道について、山崎氏からは昔の立ち小便の習慣について、山野氏からは大阪の治水の歴史について、それぞれ多岐にわたる興味



約100名が参集しました

第8回下水文化研究発表会講演集 を販売しています

頒価は会員は1000円、非会員は1500円です。ご希望の方は、はがき、FAX、e-mailにて下記まで。
NPO法人日本下水道文化研究会 事務局〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3階
FAX : 03-5363-1129 e-mail : jade@jca.apc.org

深い話題提供がありました。会場からは、大阪の昔の水の利用状況などについて質問があり、パネラーと意見交換が行われました。

セッションⅠ「下水文化史」

座長：(株)アーバン・エース 結城庸介

「1. 河内平野における悪水対策」 大阪平野のうち、生駒山地と上町台地に挟まれた地域である河内平野において、近世・近代及び現代にわたって、鯉江川の開削、古川の改修、徳庵川の開削などの悪水対策について説明された。長年にわたり河内平野の人々が悪水対策に苦闘してきたことがよく理解できた。

「2. 初期の江戸下水（その2）」 江戸時代初期の町割に際して造られた「会所地」の周りには「下水」が造られていて、「会所地」へは下水は流されていなかったことを、その当時の資料である「町触」や今でいう土地台帳にあたる「沽券図」をもとに説明された。江戸時代の町割における下水路の状況が分かる興味深い発表である。

「3. 昭和初期における屎尿の不法投棄問題」 屎尿の不法投棄問題について、その当時の実情が紹介された。都市内で汲み取られた屎尿は、屎尿運搬船により河川や湾内を航行しながら不法に船底より排出している例が横行していたようである。このような状況に対処するため、昭和5年に汚物掃除法施行規則の改正が行われた。本発表により、当時の屎尿問題の深刻さが印象づけられた。

「4. 下水路のある風景—永井荷風と滝田ゆうが描いた路地裏」 永井荷風は当時の寺島町玉の井の地を背景として、細い路地が入り組み迷路のような町に見られる不潔な溝を描写している。滝田ゆうは、細い曲がりくねった路地の溝や、雨樋、便所などを詳細に描写している。下町の下水路を「文章」や「絵」によって芸術作品として表現していることは驚きである。

「5. 下水道に対する大災害時の近隣府県の救援体制について」 阪神淡路大震災に際して大阪府及び府下自治体から多くの人々が兵庫県下の下水道施設の復興支援に携わった。その支援業務は主として管渠の被害調査とその復旧のための設計業務であった。本発表は今後起こりうる震災に対して下水道関係者が支援活動を行う際の貴重な参考になると思われる。

「6. 阪神淡路大震災の経験を風化させない（被災者の立場から）」 下水道施設に対する地震被害の特徴として、管渠の被害は比較的軽微であったこと、軟弱地盤に立地した施設の被害が大きかったことである。また、被災時の対応における要点として、他団体からの支援の受け入れ体制、下水道台帳の整備、災害査定手続きの簡素化などについて述べられた。本発表によって震災を受けた者の立場から、震災復興に関する注意点を知ることができた。

150分という短い時間内で6人の方が発表されたが、「下水文化史」の名称にふさわしい興味深い発表がなされたと思う。

セッションⅡ「海外下水文化」

日本下水文化研究会 高橋邦夫

このセッションでは、嘉田由紀子氏（京都精華大学）の「アフリカ・マラウイ湖辺での水環境保全—食糧問題とエ

コ便所導入」、保坂公人氏（五十音設計）の「バングラデシュのエコ・トイレ建設に伴う環境教育について」、永持雅之氏（大阪市都市環境局）の「ハバナの下水道とハバナ湾」、細川顕仁氏（日本下水道事業団）の「インドネシア共和国における汚水処理の状況」、谷口尚弘氏（東京設計事務所）の「ブラジルにおける下水道経営戦略」の5編の研究発表がありました。

アフリカ、南アジア、東南アジア、中南米と、気候風土、社会風土、そして衛生問題に対する住民の態様や下水道整備に対する熟度を異にする地域での多岐にわたる研究発表でした。ともすれば、無菌動物を育成するような日本の衛生整備、下水道整備の来し方を基軸に見がちな我々の視座に対する率直な文化障壁が個々の発表の基調にあったものと思います。

固有の気候風土に立地する人々の生業を文化とすれば、衛生観念の共有やその具現化としてのトイレ・下水道機能の整備は普遍性を持った文明ということができそうです。勿論、トイレ・下水道整備などの形態の差異は文化の領域に入るでしょうが。

アフリカとバングラデシュの発表は、同じ機能のエコ・トイレを学校と個人住宅に導入した例です。しかしながら、学校の共同トイレでは、管理が行き届かないことが課題として挙げられておりました。このことは、ハバナ、インドネシアにおける発表でも指摘されています。一旦我が家を出た後の汚水や下水道がどうであろうと住民の関心は極めて希薄のようです。公と私に対する文化の持つ観念の相違、生物学的に言えば、なわばりに対する文化障壁といえるかも判りません。

我々日本人が長年培ってきた資源還元型のし尿文化は、高度経済性成長期に、国策として採用された欧米型下水道整備に切り替わり、一気呵成に高度処理にまで至ったことは衆知の事実です。その結果、処理水や汚泥など資源処分型の一過性の形態を確立してきたことは否めない事実であります。そのような仕組みを維持できるのは、私が莫大な税金と料金を負担し、公の運用にゆだねる方式と言えるでしょう。私になわばりを金で確保する構図です。それも極めて狭い領域に矮小化されたなわばりといえるでしょう。我々日本人が長年培ってきた資源還元型のし尿文化における公と私、私の持つ衛生意識と行動のなわばりについて再考を促す示唆に富んだ発表会であったと思います。

セッションⅢ「下水文化活動」

(株)クボタ 福智 真和

セッションⅢでは、水文化を通して環境教育等の取り組みを行っている方々より、6編の活動状況についての報告がありました。いずれの活動も地域の中に着実に浸透し、多くの実績を上げておられ、社会的に極めて有意義な取り組みの発表でした。また、優れた論文揃いで、優秀論文2編とも当セッションから選ばれました。

「1. 上賀茂地域の活性化を目指した環境学習から地域研究への展開」は、1300年以上の歴史を持つ上賀茂の独特の伝統文化が、少子・高齢化等により、その継承が難しい状況になって来ていることから、地域・歴史への認識を高め、文化の伝承と地域の活性化を目的とした、環境学習や地域

研究等の活動についての報告である。それらの活動が地域住民に理解され、住民の主体的な活動へと発展させていく過程の様々な取り組みの手法、住民への接触における配慮などは、今後のNPO活動の参考になるものと思います。

「2. 奈良の水とまちづくり」は、古代の町づくりにおける水利用の形態を掘り起こし、水環境の悪化は、都市生活に深刻な状況をもたらして来たことを紹介し、持続発展が可能な町づくりにおいて、下水道が、水の質的・量的コントロールに今後益々重要な役割を果たしていかなければならないことを示された。

「3. 「生きている大和川」をつくるにあたり」は、ひと・暮らし・自然をテーマとして、自然や水辺に親しむ副読本として「生きているシリーズ」作成への取り組みについての発表で、子どものみならず親、教員の環境教育を目指し、極めて精力的な活動の状況が報告された。

「4. 渚処理場 試験田 ～処理水を利用した稲作～」は、下水処理水の稲作への利用の可能性について、5,000m²の大規模での実験を4年間にわたり実施して、十分利用できることを実証し、食味・抵抗感・商品価値においても遜色の無いことが示され、処理水の水循環利用の枠を広げることにつながる大変有意義な報告でした。

「5. NPO法人 京都・雨水の会 活動報告」では、雨水利用に関する、環境教育冊子の発行、国内・国際会議への参加、セミナーの開催、行政への政策提言、雨水タンクの設置・調査など広汎な活動の状況が報告されました。

「6. 市民がつなぐお寺と環境、そして地域社会」では、東本願寺の御影堂（ごえいどう）の修復工事を契機として、かつて人々の精神的拠り所であったお寺が、環境問題を一つの視座として地域との交流を進め、お寺と市民の密接な繋がりを取り戻し、新たな社会的使命を果たしていこうとする様々な取り組みについて報告された。

下水道文化を見る会を案内して

流通科学大学 長山 雅一

大阪の下水道文化研究発表会でシンポジウム「水環境と歴史」のパネラーと巡検の案内役をおおせつかった。見学は難波宮跡の湧水と排水施設の遺構や太閤下水として現在も使われている石積の下水、城下町の背割下水跡を歩いた。

この発表会と関わったことから認識を改めることが多くあり、発掘調査への課題が見つかり有意義なものであった。と云うのは、現在ではトイレから下水へ直接に放流され、下水とは汚水を流す施設である。しかし、かつての都市構造と生活スタイルでは、そうでなかったことを確認したことは、私にとっては大きな成果であった。

パネルディスカッションにおいて、私は発掘調査に見る近世大阪の下水の話を用意していた。しかし、下水を流れる水は必ずしも悪水ばかりではないことが伺われ、「太閤下水」と云われる施設が、「水道」と呼ばれていることを知った。

以前、東京の「水道博物館」で江戸における上水の展示を見た。非常に素晴らしい上水施設に感心しながらも、排水についての疑問が生じたので質問したが、適切な答えはなかった。シンポジウムにおいて江戸の上水は、水量が豊富で排水にも汚水の感覚が少なかったことを了解した。そして、排水が流れ込む隅田川の水で酒が作られていたことも紹介されていた。そして、近世史家の「当時のわが国に上水はあるが下水はない」という記述を読んで違和感を覚えていたが、事情が理解できたように感じたものだった。

発表会の翌日、森の宮貝塚をスタートに上町台地を横断し、船場の適塾まで歩いた。古代の上町台地には多くの谷があり湧水が湧いていた。越中井戸と云われる細川ガラシャゆかりの井戸や NHK 新館建設前の発掘で七世紀中葉の湧水遺跡とその排水を導く石組溝が地下に保存されている施設を案内した。NHK 地下では大阪歴史博物館の植木課長の説明をめぐり参加者と熱心な質疑が交わされた。



NHK地下の排水設備（大阪市文化財協会）

昼食後は現地公開されている太閤下水へ向かった。太閤下水は秀吉の城下町建設時に設置されたもので、今では発掘結果から江戸時代の建設の可能性が強いとされている。太閤下水とは市街地に現在も約 20Km が現役で使われており、町境を流れ背割下水と云われている。

現状の市街地では城下町の建設時に遡る門や堀の跡が、現在の道路と並行して発掘されることが多い。すなわち大阪の町は豊臣氏の城下町の街区が継承されていることになる。上町から船場へ背割下水の位置を確認しながら歩いた。

大阪の町家は間口が狭く



太閤下水

奥行きが長い「鰻の寝床」と云われる構造を持っている。そこで、道路側から町家の構造を見ることは難しい。ところがバブル後に駐車場が増え、側面から古い町家を見ることができるところが多くなっている。そのようなところから、町家が道路に面して店が建てられ、中庭を挟んで奥に「はなれ」と蔵がある。そして、背中合わせの家との間に背割下水が存在しているのである。背割下水はそのように配されたものである。

見学の最後に緒方洪庵の「適塾」へ向かった。適塾の裏には背割下水敷を示す幅約1mの未舗装部分があった。途中、道修町の神様「神農さん」に立ち寄った。神農さんの秋祭にはコレラ除けのまじないに起原を持つ「張り子のトラ」が配られることは良く知られている。思いがけなく、ここにおいても大阪の下水との関連を知ることとなった。このように、案内役のわたしにとって、実に興味深い見学であった。

優秀論文賞受賞を縁として

東本願寺・御修復事務所 延澤 栄賢

このたび、思いがけず優秀論文賞という栄誉をいただいた。しかしその背景には、仏教や宗教の「これから」への期待と叱咤激励のあらわれがあり、お寺の社会と関わる姿勢が問われているのだと、私自身は受け止めている。

発表会当日は、東本願寺における環境問題の取り組みとして、伝統建造物の修復における雨水タンクなどの環境設備の導入、瓦再資源化の取り組み、そして「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」という地域住民や環境NPO団体との協働的な活動を紹介した。またそれらをつなぐ共通項として、「現代社会に投げかけられている課題やいのちのつながりについて学び、考える場を提供することはお寺の社会的責任でもある」とした。

発表の場では、たいそうなことを申し述べたが、翻ってみると私自身、本当に時代の課題に耳を傾けていたのだろうか、多くの方々とこうした課題を共有したいと思いつつも、そのことが果たせているのだろうか、ということを考えさせられる。

後日、「研究発表会講演集」を拝見させていただいたが、そのどれもが素晴らしい内容で、且つ各人の積極的な取り

組み姿勢が窺えるものであった。また、当日の発表会を思い起こせば、多様な分野・立場の方々が寄り集い、多角的な視点を述べられ、私の中に今後の取り組みに向けた新たな視座を生まれせしめるような大変有意義な時間であった。

まさに、このたびの優秀論文賞受賞というひとつの出来事は、私にとっての新たな課題となった。まずは、京都という可能性あふれる地で、現代社会から照らされる課題を自らが学び、何ができるのかを真摯に考え、真向かっていくことで、本会よりいただいた「受賞」という課題にこたえたいと思う。

最後に、このような意義ある会を積極的に推進し、細やかな準備をされていた酒井代表、発表の機会を与えていただいた木村関西支部長をはじめ、関係各位に敬意を表し、併せて今後も持続的に交流の場が展かれることを祈念して、結びの言葉とさせていただきます。

※東本願寺における環境問題への取り組みや、修復工事の進捗を「しんらんしょうにんホームページ (<http://higashihonganji.jp/>)」にて紹介しています。是非ご覧いただければと思います。

下水処理水の農業利用促進に向けて

大阪府東部流域下水道事務所萱島工区 遠藤 淳

下水文化研究発表会という発表機会をいただいたうえ、優秀論文賞をいただきましたこと、まずはお礼申し上げます。

今回は、淀川左岸流域下水道渚処理場（大阪府枚方市）にて平成13年から実施している「なぎさ試験田 ～処理水を用いた稲作～」の取り組みについて発表いたしました。なぎさ試験田は大阪府、枚方市御殿山土地改良区が主体となり、大阪府立食とみどりの総合技術センター、北河内農業協同組合、淀川左岸流域下水道組合等の各機関の協力を得て実施しています。

都市近郊農業においては、質・量ともに安定した用水水源の確保が課題となっており、改良区での本格的な稲作利用を目標にこの取り組みを行っております。

試験経過については、データの積重ねから大阪府立食とみどりの総合技術センターより「処理水は稲作用水として高い品質を有している」との評価をいただいております。さらに、同センターでは処理水が質・量とも高いレベルで安定していることから、稲作以外の作物への利用が可能と考え、

イチゴ、トマトの水耕栽培試験を実施しています。処理場には、水、熱、空間があることから、私市のイチゴ狩（計画区域内の交野市私市はイチゴ狩が盛んに行われていた。）をここで復活できないかというのがセンターの狙いで、処理水の農業利用を積極的に検討いただいております。

しかし、一般的には処理水の評価は低く、安全性に対して不安を感じている方が多く、「なぎさ米」に対しても漠然とした不安があるようです。この悪いイメージを変えるために試食米の配布、アンケート等のPR活動を行っています。食べていただくと「おいしいお米」であることがわかっていただけなのですが、どうしてもイメージが先行しています。「昔は肥、今は処理水」をキャッチフレーズに処理水の評価を高めていきたいと思っております。

平成17年度国土交通大臣賞（いきいき下水道賞）下水道有効利用部門の受賞に続いて、第8回下水文化研究会発表会においても高い評価をいただいたことで、今回の取り組みが大きく前進するものと思っております。ありがとうございました。

第35回 定例研究会「都市近郊農村の下肥利用」報告

2006年10月7日(金)、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センターにおいて、第35回の定例研究会(第38回尿尿研究会例会とのジョイント)が行われました。講演者は葛飾区郷土と天文の博物館の学芸員である堀充宏氏にお願いしました。演題は「都市近郊農村の下肥利用」です。

江戸の町が都市として形成されてくるとともに、尿尿の処理が大きな都市問題となったが、周辺の農村が肥料として尿尿を購入したことによって解決され、以後、都市(江戸・東京)とその近郊農村は、昭和30年頃まで尿尿と農産物とを介して密接にリンクされていたとのこと。講演の骨子は次のとおりです。

- ① 葛飾区周辺では、肥舟がどこの堀割にも見られた。そこで、博物館では地元の船大工に依頼し2分の1の縮尺の肥舟を作り、展示している。
- ② 下肥は各地の河岸の下肥売捌人により、世話人を通じて村々に売られた。

- ③ 富裕な農家が下肥運搬船を所有し、船頭を雇って業として行うようになった。船頭として一人前に操船できるようになるには、3~4年かかった。
- ④ 明治以降、中川沿いの村々には下肥仲介業者が多くいた。河岸から内陸への輸送のための馬車屋も多く抱えていた。
- ⑤ 下肥をきたないと感じる感覚は、農家を長くしているとなくなるようである。
- ⑥ 下肥の代金は盆暮払いであり不作の年には現金で払えず、耕地を手放す農家が多く、下肥仲介業者はきまって川沿いの耕地を多く所有していた。
- ⑦ 下肥を運ぶ船が派手な意匠をこらしたものであったり、下肥の売買に携わる人々が豪華な生活や身なりをしていたことは人々によく記憶されている。
- ⑧ 博物館製作の「下肥を用いた堆肥の作り方」を再現したビデオが紹介された。

第36回 定例研究会「ヨルダンにおける下水処理水の灌がい用水化」報告

2006年12月2日(金)、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センターにおいて、第36回の定例研究会(第39回尿尿研究会例会とのジョイント)が行われました。講演者は、元昭和エンジニアリング(株)に勤められていた上田恵一氏にお願いしました。

標記の演題は、定年退職後、JICAのシニアボランティア活動に参加されたときの体験に基づくものです。講演の骨子は次のとおりです。



研究会参加の皆さん・前列中央が上田氏

- ① ヨルダンは、ここ50年間でパレスティナ難民を中心に人口が10倍に急増し、深刻な水不足国となる。
- ② 国土の80%が砂漠で、農業が70%の水を消費している。

- ③ JICAのスタディチームのまとめたシナリオでは、「90%が蒸発してしまう表流水を使い切る。下水処理水の再利用率のアップ。やがて可能となる海水の淡水化の実現まで、化石水であるディシイの地下水を飲みつなぐ。」こととしているが、当然、農業用水の使用比率を下げ、さらに漏水、盗水、未収入水率を低下させることが前提となる。そこで、下水処理水の再利用が重要課題となる。
- ④ 下水処理水の再利用の実証試験：実証地域は世界遺産ペトラの近隣のワディ・ムーサ地域で、下水処理水を乾燥地域の農業や産業開発に再利用する。
- ⑤ 下水処理施設は、オキシデーショナルディッチで間欠的嫌気好気ばっ気方式。テストした作物は、穀類、果樹、家畜飼料用の牧草など。
- ⑥ 蒸発を防ぐため、間欠的に処理水を注入し、処理水を土中にできるだけ浸透させる灌がい方式を試験した。日本の棚田をイメージしたウェットランド手法を導入。
- ⑦ 沢山の写真を駆使しての、ヨルダンを中心としたアラブの現況説明があった。

(運営委員 地田修一)

第40回尿尿・下水研究会例会のご案内

下記の要領で、第40回尿尿・下水研究会例会を行います。ふるって参加してください

記

日時：平成18年3月17日(金)午後6時30分より

講師：関野勉氏(本会会員)

演題：「トイレマナーとトイレ文化」

民族や文化によって異なるトイレのマナーを紹介します。

場所：東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センター(セントラルプラザ 10階) B会議室

電話 03-3235-1171 交通：JR・地下鉄 飯田橋駅下車1分

尿尿・下水研究会 特別企画のご案内

尿尿研究会主催の千葉県市原市の下水関連施設の見学会を下記の要領で催します。当日はマイクロバス（運転手付き）にて、各施設を巡回し担当者からの説明を受けます。ふるって参加のほどお願いいたします。

記

期日：平成18年2月28日（火） 集合時間：午前10時
※市原市役所の都合により、先日の例会でお知らせした日程を変更しました。

コーディネーター：菅家啓一氏

見学場所：下水処理場、農村集落排水処理、尿尿処理など

集合場所：JR 五井駅

参加費：一人 2000 円

なお、見学会終了後（午後5時30分頃から）、希望者による懇親会を企画しています。見学会に「参加を希望」される方は、地田の携帯（090-7816-6299）まで、ご連絡ください。

参考：列車時刻（総武快速線）

	東京		五井
行き：	8:54	→	9:55
帰り：	22:04	←	21:10

分科会名称の変更 「尿尿研究会」から「尿尿・下水研究会」へ

分科会の「尿尿研究会」（当初は「し尿研究会」と表記）は、3ヶ月に一回例会を開き、トイレ、尿尿あるいは下水に関する講話会を主体とする活動を続けてきました。最近では下水に関わる講話も多くなり、また会員からもこの分野に対する要望が増えてまいりました。これらの状況を考えまして、分科会「尿尿研究会」の名称を「尿尿・下水研究会」と改めることにしました。今後は、より広い分野での講話会の企画を目指していきたくと思います。なお、年に何回かは、処理施設や博物館の見学あるいは遠方の方へのインタビューも試みますので、これから多くの方の参加をお待ちしています。（尿尿研究会会長 地田修一）

バングラデシュ・エコトイレ普及活動だより

12月より新たなプロジェクトサイトでトイレ建設が始まった。昨年造ったトイレは、第1便槽を半年使ったあと、9月から乾燥期間に入っていた。約3ヶ月経過し、封印し

ていたモルタルを壊して中を確認した。そこにあったものは何の臭いもしない腐葉土のようなもの。はじめは何だろうと見ていた人々もやがて棒でかき回し、手に取る。しかも右手でしっかりとウンコを



つかんでいる。人々の間に笑顔の環が広がった。イスラムの人は、南アジアの人は、人糞を農地で使わないのだと、何人もの人から聞かされてきたけれど、それは彼らに経験がなかっただけだと改めて実感した。でもまだ、成功と喜んではいけない。土壌に還元して本当に効果があるかを確認するまでは。

このとき、尿散布の肥料効果を確かめる実験農地でキャベツとカリフラワーの栽培が始まった。今年になって、地球環境基金の人たちが視察で訪問されたとき、尿と化学肥料を比べて、キャベツもカリフラワーも成長に差が見られないことが示されたそうである。これから、貴重な記録をきちんと残して、継続につなげなければならない。

運営委員会・事務局より

- 大阪での研究発表会の開催、内容的にも参加者数でも成功であったと思います。ご協力いただいた関西支部の方々に御礼申し上げます。1ページにも掲載しましたが、**研究発表会講演集**の購入をお願いします。とくに大阪開催のため、参加できなかった東京の会員の皆様よろしく申し上げます。
- ページ数の関係もあり IV セッションの座長報告が掲載できませんでした。お詫び申し上げます。なお、関西支部ホームページにも研究発表会の報告が掲載されています。
- この会報にバルトン記念事業に関するご案内と協賛依頼書を同封させていただきます。谷口評議員の言葉にもありますように、本年の記念事業には幅広い賛同を得ることができました。技術の伝承が難しいといわれる昨今ですが、わが国衛生工学の黎明期の足跡を振り返る良い機会になると思いますので、ご賛同いただきますようお願い致します。
- 機関誌「下水文化研究」17号が現在印刷中です。来月前半にはお届けできると思います。

編集後記 日本が技術を培ってきたなかで蓄積された知恵やノウハウを世界の多くの地域で活かし、その地域に適した技術を開発することは、今の日本に求められることなかで重要な位置を占めると思う▶バルトンのふるさとスコットランドからは、日本ばかりでなく多くの国との技術交流を展開してきたことで知られている▶それは一方の技術移転ではなく、日本での成果が本国にも影響したとも言われている▶そんな関係が、日本と途上国の間の技術協力のなかでも生まれることにならないかと、密かに期待しているのだが、可能性はないだろうか。（酒井 彰）

ふくりゅう 通巻45号目次

バルトン生誕150年記念事業が行われます 第8回下水文化研究発表会が開催されました	1
下水文化を見る会を案内して	3
優秀論文受賞者からのメッセージ	4
第35回定例研究会報告 第36回定例研究会報告	5

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会
〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F
TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>
関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>